

ふむふむひがしく



今月は、今年で130年を迎える札幌市無形文化財第1号「丘珠獅子舞」について詳しく解説します。

丘珠獅子舞の構成

丘珠獅子舞は、大きさが8mで、頭振り1人、胴幕の中に縦一列7人が入り、連携した動きをとることで、躍動感あふれる踊りが表現されます。獅子を退治する「獅子取り」という役割を小学生や中高生が担っています。

また、囃子は5人の横笛と縦笛、2人の太鼓で構成されており、集団を先導する露払いという役割を天狗と般若の2人が担います。



2人の太鼓と5人の囃子

(丘珠獅子舞保存会提供)



先導する露払い



7人が操る胴体

演目

丘珠獅子舞の演目は、全部で15種に分かれています。

- ①道中、②行列、③睨み、④小雑刀の舞、⑤剣の舞、⑥扇の舞、⑦鎌の舞、⑧棒の舞、⑨大雑刀の舞、⑩引き棒の舞、⑪跳び棒の舞、⑫太刀の舞、⑬二人太刀の舞、⑭唐傘の舞、⑮乗り獅子、とそれぞれに特徴のある内容になっています。



③睨み



⑥扇の舞



⑦鎌の舞



⑧棒の舞



⑬二人太刀の舞

「舞を奉納する」と表現するのはなぜ？

奉納とは、神仏への感謝や祈り、^{しんじ}真摯な気持ちを込めて納めること（見てもらうこと）です。

丘珠獅子舞は、明治25年に丘珠神社ができた時に^{ごこくほうじょう}五穀豊穡・^{むびょうそくさい}無病息災・家内安全を祈願して舞を奉納したのが始まりといわれており、神仏（丘珠神社であれば祭神の天照大神）への敬意・感謝・願いといった気持ちから奉納という言葉が使われるようになったと考えられます。

獅子舞にかまれるとご利益があるといわれるのはなぜ？



獅子舞の獅子は、^{えきびょうたいじ}豊作を願い、疫病退治、厄払いをするものとされており、頭をかむことで、「人に取りついた邪気を食べる＝ご利益がある」といわれています。このことから、無病息災と厄除け、さらには学力向上といったご利益を期待して頭をかんでもらうようになったといわれています。



広告